

風姿花伝第六、花修くわしゆ云四

能と為手の位との相応

一、能の善き悪しきに付け  
て、為手の位に依りて、相  
応の所を知るべき也。文字  
風体を求めずして、大様  
なる能の、本説殊に正し  
くて、大きに位の上がれる  
能あるべし。かやうなる能

(口訳) 能を演ずる際に、如何なる曲が善  
いか又は悪いかといふ事を定める場合  
に、その演者の芸の位に相応するとい  
ふ事を考へなければならない。能の中  
には、大やうな能で、別に文字文章の  
美しさや風体の幽玄などといふ事を求  
めて作った曲でなく、正しい典拠によ  
つて作られ、非常に曲の位の上つた能  
があるものだ。かやうな能は、見物  
の目にうつる処は、さほど細かな面白  
味の無いことがある。かやうな能にな  
ると、相當に上手といはれてゐる為手  
が演じても、うまく似合はない事がな

は、見所さほど細かに無き事あり。これには、良き程

の上手も、似合はぬ事あり。

仮令、これに相応する程の、

無上の上手なりとも、又、

目利き・大所にて非くば、

善く出で来る事あるべから

ず。これ、能の位・為手の位・目利き・在所・時分、

悉く相応せずば、出で来

る事は左右無く有るまじき

也。

又、小さき能の、さしたる

本説にては非けれ共、幽玄

る。又、たとひこの位の上つた曲に相応する程の無上の上手が演じても、鑑識眼の高い見物の前や、晴れの檜舞台といふべきやうな大所で演ずるのでなくては、その能がうまく成功を収めるといふことはあり得ない。即ち、能といふものは、その曲の位・演者の芸位・観賞者・その演能の場所・演能の時分、これ等が悉く相応し合致しなくては、容易に成功するものではないのである。

又能の中には、小さい能で、さして立派な典拠によつたものでもないが、幽玄なもので、細々とした能がある。

なるが、細々としたる能あり。これは、初心の為手に  
も、似合ふ物也。在所も、  
自然、片辺の神事、夜な  
どの庭に、相應すべし。良  
き程の見手も、能の為手  
も、是に迷ひて、自然、田  
舎・小所の庭にて面白けれ  
ば、その心慣れひにて、押を  
し出したる大所・貴人の御  
前などにて、或ひは、顛負ひいき  
ければ、為手にも名を折ら  
せ、我も面目無き事ある物

かやうな能は、初心の為手にも似合ふものである。演ずる場所も、従つて、片田舎などの神事猿楽や夜能などにふさはしい。相当な批評者も、又相当な為手も、かやうな能にだまされ易いもので、田舎や又小さい場所の演能で面白いと感ずると、それと同じやうな積りになつて、堂々とした大舞台や、貴人の御前の能などで、これを覇負興行して見たりするが、その能が思の外に不出来だとなると、役者にも汚名をつけ、自分も面目を失ふといふやうな事ががあるのである。

なり。

然れば、かやうなる品々・

所々を限らで、甲乙無から

ん程の為手ならでは、無上

の花を究めたる上手とは申

べからず。去る程に、如何

なる座敷にも、相応する程

かやうな次第だから、かやうな曲の種類の限定もうけず、如何なる曲を演じても、又その場所が如何やうな舞台で演じても、一様に甲乙なく上手な演出を見せる為手でなければ、無上の花を究めた上手と称することは出来ない。従つて、如何なる場所舞台に於ても、それに相応して演じ得るほどの上手となると、もはやは是とか非とかの論義はなくなるものである。

の上手に至りては、是非無し。

又、為手に依りて、上手程

は能を知らぬ為手も有り。

能よりは、能を知るも有

り。貴所、大所などにて、

上手なれ共能を為違へ、ちゝ

どものう

しちが

ちゝ?

又、為手によつては、其の伎の上手であるほどには、能といふものを知らぬ為手もあり、又これと反対に、その伎の程度以上に、能といふものを知つてゐる為手もある。貴人の御前や堂々たる晴れの舞台での演能に於て、伎は上手でありながら、能を為違へてちゝのあるいは、これはその為手が能を知らないためである。又それほどに伎も

の有るは、能のうを知しらぬ故ゆゑ也。又それほどに達者たつしゃにも無く、物少すくななる為手しゆの、申さば初心なるが、大庭おほにはにても花失うせず、諸人しよの褒美ほうび 弥增いやまして、さのみに、斑むらの無からんは、為手しゆよりは、能のうを知りたる故ゆゑなるべし。去る程ほどに、此の両様りょうようの為手しゆをとりぐに申事まうすことあり。しかれ共とも、貴所のう、大庭などにて、普く能のうの善からんは、名望めいぼう長久ちやうきゅうなるべし。さあらんにとりては、上手の達たつ

上手でなく、又やり得る能数も少し持つて居ないやうな為手——いはば初心ともいふべき為手——が、堂々たる舞台に於ても花を咲かせ、諸人の褒美が弥益しに加はり、又さのみにその芸の出来ばえに甲乙なく、いつも相当に成功を収めるといふのは、その伎よりは、能を知つて居るためであらう。それで、世人の評も、かやうな両様の為手を、とりどりに、或は前者がまさるといひ後者がまさるなどと、批評するものである。しかし、貴人の御前や晴れの舞台で、普ねく能が良く出来ると申すべきであらう。

者程は、我が能を知らざらんよりとも、能を知りたらんは、一座建立の棟梁には勝るべきか。

能を知りたる為手は、我が手柄の足らぬ所をも知る故

に、大事の能に、叶わぬ事をば斟酌して、得たる風体ばかりを先立てゝ、仕立て善ければ、見所の褒美必ず有るべし。さて、叶はぬ所をば、小所・片辺の能に為習ふべし。かやうに稽古す

能を知つてゐる為手は、自分の伎倆の不足な点についても自覚してゐるから、大事な能に於ては、自分の力に叶

はぬ事は斟酌して控へ、自分の得意とする風体の能ばかりを先立てて演ずる、そしてその能の仕立てが立派であれば、必ず見物の賞讃を得るであらう。而して、自分の不得手な所をば、小所の能や片田舎の能などの際に仕習ふやうにするであらう。かやうにして稽古を積めば、不得手な所も、稽古の劫をつむにつれて、自然に出来得るやうになるであらう。それで、遂には、能に嵩も出来て來、欠点も脱け落ちて、いよいよ名望も上り一座も繁昌するやうになれば、定めて老齢になるまでも

れば、叶はぬ所も、劫入れ  
ば、自然くに叶ふ時分あ  
るべし。去る程に、遂には、  
能に嵩も出で来、垢も落ち  
て、弥々名望も、一座も、  
繁昌する時は、定めて年行  
く迄、花は残るべし。これ、  
初心より能を知る故也。能  
を知る心にて、公案を尽く  
して見ば、花の種を知るべ  
し。然れども、この両様は、  
普く人の心々にて、勝負を  
ば定め給べし。

花修已上

花は残るであらう。これ即ち、初心の時代から能を知つてゐた故である。この能を知る心でもつて、工夫公案をつくして見れば、必ず花を咲かすもと、を知るに至るであらう。しかし、この両様（上手な割に能を知らぬものと、初心より能を知るものと）の何れが良いかは、人々の心々にそれぞれに考があるであらうから、めいめいに批判し勝負を定めて見るが良からう。

此条々心ざしの芸人より外

は一見をもゆるすべからず

世阿（華押）

〔評〕

この段は二つ中心点がある。はじめには「相応」といふことが眼目であり、後には「能を知る」といふ事が眼目として論じられてゐる。而して大きくこれを引きくるめると、「能を知る」といふことが全体を貫く

ものであることがわかる。

先づ能が良いか悪いかといふ事は、その能を演ずる為手に似合ふか似合はないか、時と場所に相応するかしないかといふ点で定めるべきであるといふ考は、實に老巧で、実地の経験で鍛へたものでなくては、一寸かうした断定は出来ないと思はれる。即ち文字風体を求めず大やうな能で本説正しい能などになると、老巧で無上の上手な為手以外には、こなし切れない。即ちそれ以外の者には、曲柄は良くても、悪い能である、又上手に於ても、時と場所と見物人の観賞眼の高さといふものが揃は

なくては、褒美を得る事はむづかしい。従つて、上手にとつても、時と場合が相応しなければ悪い能といふべきである。又、細々とした小さい能の幽玄なものになると、初心にも演じ得るし、田舎でも賞玩せられるといふのであるから、さうした演者と場合には良い能である。しかし、これは貴所大庭の晴れの能には向かないとすれば、さうした場合には悪い能である。この見さかひを附けることが大切であつて、それが出来ねば演能は失敗である。その見さかひをつけることは、「相応の所」を知ることなのである。

次に「能を知る」といふ事は、曲の位と、演者の位と、場所や観賞者との相応を知るといふ事である。その相応を知つて、適当な曲を選ぶだけの見識を備へてゐる事である。これは芸の上手下手とは無関係に、天稟的にそなはる事もあるが、大体はやはり研究工夫をつまなくては上達しないものと見るべきであらう。そして、能に花を咲かせるが為には、これが是非必要なのであつて、一座建立の棟梁となるには、能を知らなくては全く駄目であるといふべきである。芸が上手でも、花のありやうを知らぬ者は、その名望はやがて地に落ちる。その花の種を知るもとには、この能を知る事が基礎となるのである。

かやうに考へて來ると、「相応」といふことは結局「能を知る」といふことへの導きともなるかに考へられ、この段全体が、「能を知る」ことによつて、一貫せられてゐることも、自づから明らかになるであらう。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著